

### 第三 現地視察調査

現地視察調査として、2015年11月29日にシェア金沢、金沢21世紀美術館を、11月30日に、一般社団法人でんき宇奈月プロジェクトをそれぞれ訪問し、高齢者福祉、文化、地域エネルギーといった分野で、地域の特色を生かした地域創生への取組みについて、意見交換を行った。

#### 1. シェア金沢

説明者 社会福祉法人佛子園常務理事兼シェア金沢施設長 奥村俊哉氏

##### (1) シェア金沢の理念

- 政府のまち・ひと・しごと創生本部が日本版CCRC、「生涯活躍のまち」を推進されている。その中でこのシェア金沢が高齢者が住みやすいまち、いわゆる日本版CCRCを率先しているということで、見学に来ていただく機会が少しずつ増えている。
- シェア金沢は、CCRCを目指してまちづくりをしたわけではない。ここは、社会福祉法人佛子園という組織の施設で、戦後に戦災孤児をお寺にお預かりしたところからスタートしている。障害を持った子どもたちを中心にまちづくりをしたので、「CCRCで」と言われると、実はそうではないという部分をいつも説明している。シェア金沢は2016年3月で2年になるが、ようやく地域の方々に、ここは別にシェア金沢の本部である佛子園の場所ではなく、自分たちが自由に利用できる場所だと理解いただけた。

##### (2) 社会福祉法人佛子園の始まり

- シェア金沢の本部である佛子園が障害児の入所施設で始まり、まちづくりが広がっていった理由として、私たちの法人の変遷、国の制度等もあった。佛子園は、石川県白山市の行善寺で現在の理事長の祖父が住職をしていて、そこに戦災孤児を引き取り始まった。
- 1960年には、子どもが30人を超えるようになった。畑で野菜つくったりして生活をしていたが、支えていた大きな柱は檀家さんのお布施だった。しかし、たくさんのお子どもたちがお寺で生活しているため、葬式等を挙げることもできなくなり、檀家さんが離れていった。どうしてもこれ以上は成り立たないとい

うことで、1960年に正式に社会福祉法人の資格を取るようになった。

- 石川県に相談したところ、石川県には養護施設は幾つかあるが、知的障害児が親元を離れて入所できる施設がないので、「今から新たに子どものための社会福祉法人を立ち上げるのであれば、知的障害児入所施設という機能を果たせるようにしてください」という指導があった。私たちは障害があってもなくても、みんな仏様の子もだと思い、佛子園という名前で1960年に社会福祉法人の資格を取って、新たにスタートした。



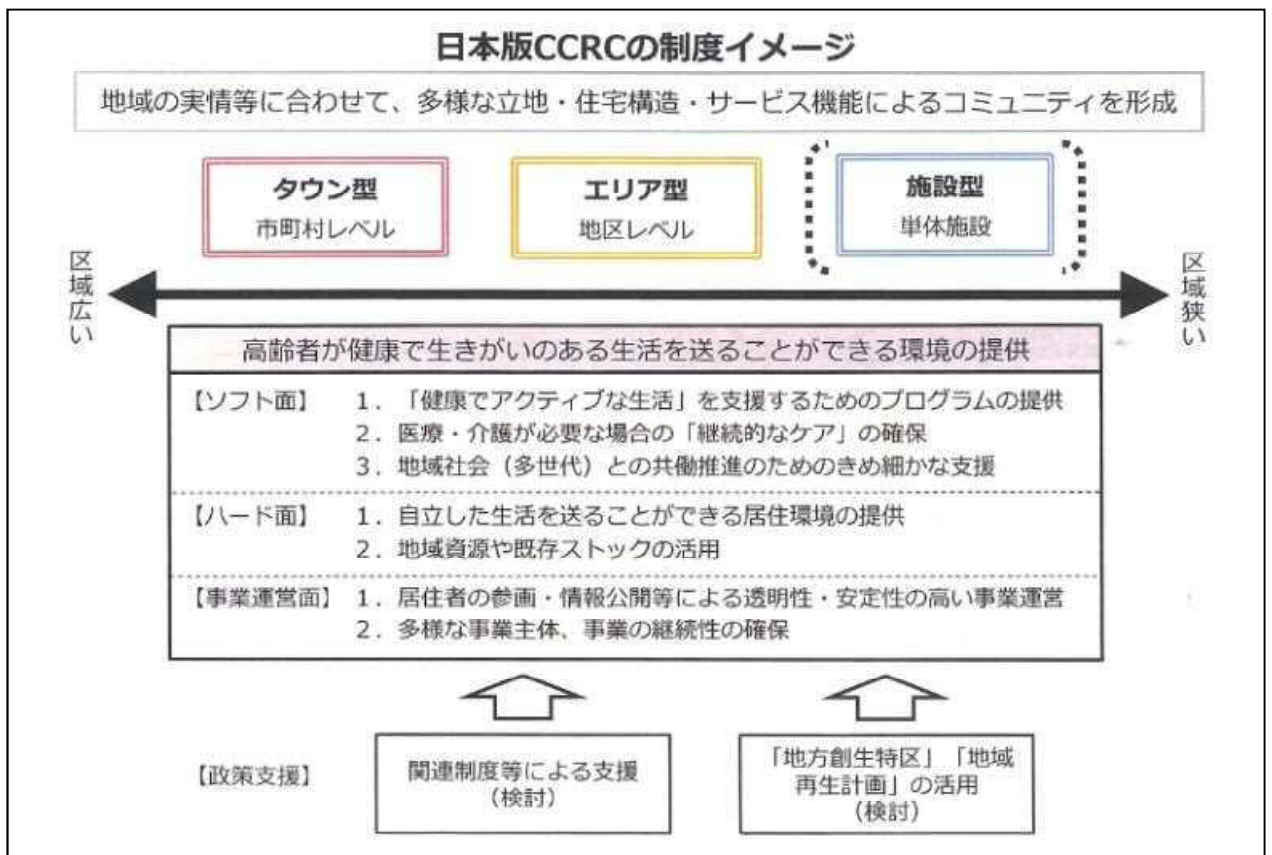
資料1 「佛子園」の組織概要と取り組み事業(シェア金沢資料)

- それから5年をかけて、お寺の敷地の一部を社会福祉法人佛子園に譲渡し、そこに2階建ての施設を建設して子どもを移した。その建物が半世紀経ち、老朽化したので、移転先を探したが、なかなかうまくいかず、結果的に来られたのが国立若松病院といういわゆる結核患者の療養施設だった現在の場所であった。管理は、独立行政法人国立病院機構だったので、そこと話をし、私たちはここに来ることができた。

### (3) 佛子園の組織概要と取組み

- 奥能登にある日本海倶楽部は、一定の年齢になり、施設から出ていかなければならない障害の重い人たちを生涯見守って行くための施設である。今、障害福祉では、障害があっても仕事を通じて地域にかかわっていくということが世界中の考え方となっている。
- 奥能登はもともと過疎地で、地元の人でも出稼ぎに行く土地柄のため、障害者が生活をしながら仕事ができる場をつくり、さらに仕事のない奥能登の人たちがそこで働けたらなおいとと考えて取り組んだのがビールづくりである。
- 当時橋本龍太郎内閣の時代で、ビール醸造においても大きな規制緩和があった。日本中で、いわゆる地ビールメーカーがばたばたとできた、あの流れに乗って奥能登でビールの工場をつくった。
- この日本海倶楽部は、昨年、日本で一番優秀なビール工場を表彰するブルワリーオブザイヤーに選ばれた。今現在、全国で170店舗、首都圏でいうと70店舗弱で飲んでいただいている。ビール工場の生産が追いつかなくて、2年後をめどにプラント工場を増築しようと思っている。「奥能登ビール」、「日本海倶楽部ビール」と言うと、ビール業界では通じるようになっている。
- 日本海倶楽部は、初めて、障害を持った方々を対象に就労事業に取り組んだ施設で、ここが私たちの就労事業の考え方の核となっている。
- 政府が地方創生本部を立ち上げるときに、出向する各省庁の方々が、うちの法人を何回かに分けて視察に来られた。そのときに、その方々が一番関心を持って見られていたのが西圓寺であった。
- 私たちシェア金沢のスタッフも、この西圓寺を目指しているし、この西圓寺がシェア金沢のすべての考え方のもとになった施設である。
- 「美川37(みんな)cafe」という施設がある。ここは、JRはどこの田舎に行ってもその地域の中心にあるため、JR美川駅そのものをコミュニティーセンターにしてしまおうという考え方でつくった施設である。
- 美川駅では、高齢者・障害者向けのデイサービスがあり、障害者の仕事として、駅の清掃、警備、管理、駅の中のカフェの運営、ギャラリーの運営、駅前の駐輪場・駐車場の管理もすべて行っている。この駅で乗車される人は700人ぐらいだが、デイサービス、カフェ等に来られる方は、1,600人を越え、田舎だが、非常ににぎやかな駅になっている。

- 美川駅をスタートに、石川県内のJRの四つの駅が、既に障害者がかかわる施設に切り替わってきた。私たち佛子園以外の法人もスタートしている。JRの駅は、沖縄県以外の日本中にあるので、この動きが他の都道府県にも広まると、日本のいわゆる障害者の雇用の問題は一気に解決するのではないかと考えている。今、石川県では、他の法人もかかわってくれて、非常にいい流れになっている。
- まち・ひと・しごと創生本部が、日本版CCRC、今で言うところと生涯活躍のまちを実践していくときに三つの手法（タウン型、エリア型、施設型）を紹介している。

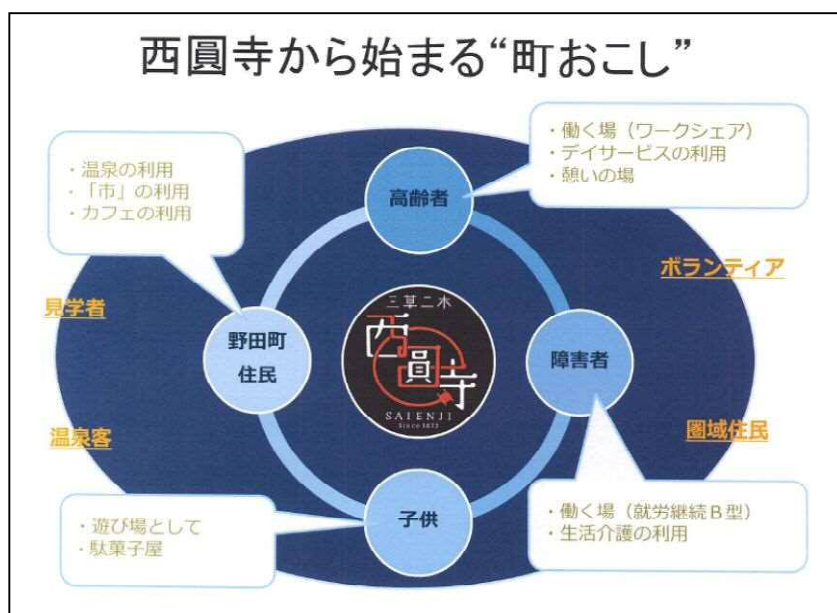


資料2 日本版CCRCの制度イメージ（4月3日開催 まち ひと・しごと創生本部会合資料）

- シェア金沢はエリア型で、シェア金沢が目指している西圓寺は施設型である。西圓寺は、石川県金沢市野田町という55世帯しかない小さなコミュニティーに450年続いた浄土宗のお寺で、ここが廃寺になったので、コミュニティーセンター機能を持たせながら、高齢者福祉を進めている。石川県白山市と輪島市でもタウン型のCCRCに取り組んでいる。
- 佛子園は障害者施設しか運営していなかった。地域福祉にも入ったきっかけは、10年ほど前にあった、四つ目のグループホーム建設への地域の方々からの反対運動にあった。

- 年に1回バザーを開けば、地域の人たちが笑顔で来てくれるし、3年に1回は、シンポジウムを開いて地域の役員の方々に来てもらっていたので、私たちの活動を理解してくれていると、大きな勘違いをしていたのではないかと考えた。そのようなことではなくて、この自閉症のAさんはこういう人なので、こういうふうに地域で受け入れてほしいという、個人の理解を得るようなことはどこまでしていたのかと反省をしていた。

- そのときに、西園寺の人たちと一緒にコミュニティーセンターをつくっていくということにかかわるようになり、ここが私たち法人の大きな転換点であった。西園寺は、住職がいなくなって廃寺が決定したときに、野田町の皆さんが話し合っ、建物も敷地も全部佛子園に譲渡して、コミュニティーセンターにつくり直すということを決められたことから始まった。



資料3 西園寺から始まる町おこし(シェア金沢資料)

- 佛子園は、この決定について二つのことをお願いし引き受けた。一つは、野田町の皆さんのためのコミュニティーセンターなので、野田町の55世帯の皆さんみんなにかかわっていただくこと、二つ目は、私たちは障害福祉が専門なので、障害者がかかわれる場所にしていただくということであった。
- 2007年に町内全体で、敷地を整え掃除等をして、オープンした。ここには、仕掛けとして温泉をつくった。温泉を開放すれば野田町の皆さんが来てくれるだろうし、この施設にかかわってくれると考えた。
- 西園寺の入り口には、住民の皆さんの名前がすべて入っている「小松市野田町民全員の西園寺温泉入湯札」というボードがあり、来られると札を返すようになっている。これで野田町の住民の皆さんの動きが、毎日手に取るようにわかる。地方創生本部の皆さんが、一番おもしろがって帰られたのは、このシステムである。
- 西園寺の本堂は、居酒屋にして簡単なカウンターをつくり、能登ビールも飲

めるようにした。日中は高齢者デイサービス、生活介護を行っているので、この本堂では、いろいろな人がバイタルチェックをしたり、講座を受けたり、温泉に入って寝転がったり、食事をしたりしている。

- ここでは、たくさんの知的障害の方、高齢者の方も近隣から通って働いている。居酒屋の接客をしたり、おみそ、梅干し等もつくっている。野田町の皆さんが責任を持って、そういうお世話等をやってくれている。
- 西圓寺は、高齢者も障害を持った方も子どもたちも住民の皆さんも、それぞれの目的で集まる。同じ高齢者でも働きに来る人もいれば、デイサービスに来る人もいる、あるいは温泉入りに来る人、遊びに来る子どもたちもいる。近隣のボランティアの方、圏域の住民の方々に支えられて毎日活動している。
- 西圓寺が2007年にスタートしてから、6年半で野田町の世帯数が55世帯から69世帯に増えた。近隣はすべて人口が減少している地域である。なぜ増えたかという若い世代が出ていかなかったこと、就職のために出て言った若者が帰ってきたことがある。
- 先ほどお話した、「小松市野田町民全員の西圓寺温泉入湯札」のボード・名前を記入していただくノートで、各家が西圓寺にどのくらいきているかのデータが取れる。温泉に入って会話をすることにより、つながりができたという話もよく聞いている。そのようなことを重ねて住民自治を一緒に行っていく中で、野田町は本当にかかわりが強いまちになっていると思う。
- 本当にシェア金沢がやりたいのは、この部分である。5年後、10年後、シェア金沢を西圓寺のようにしていくことが、ここでかかわっている人たちのミッションになっている。

#### (4) シェア金沢のまちづくり

- シェア金沢では子ども、障害児、高齢者、学生が住むエリアを分けていない。「ごちゃまぜ」というのをキーワードにし配置している。自閉症の子どもたちの住む家、サービス付高齢者向け住宅、学生が住む家が隣や向かいにある。毎日、隣とか向かいに住んでいる人たちの気配を感じながら生活をしたいので、道もわざと細くしてくねらせている。行き交うとき、すれ違うとき、道を譲り合うときに、何かしら視線を交わす、声をかけ合うとかということが生まれてほしいと思っている。

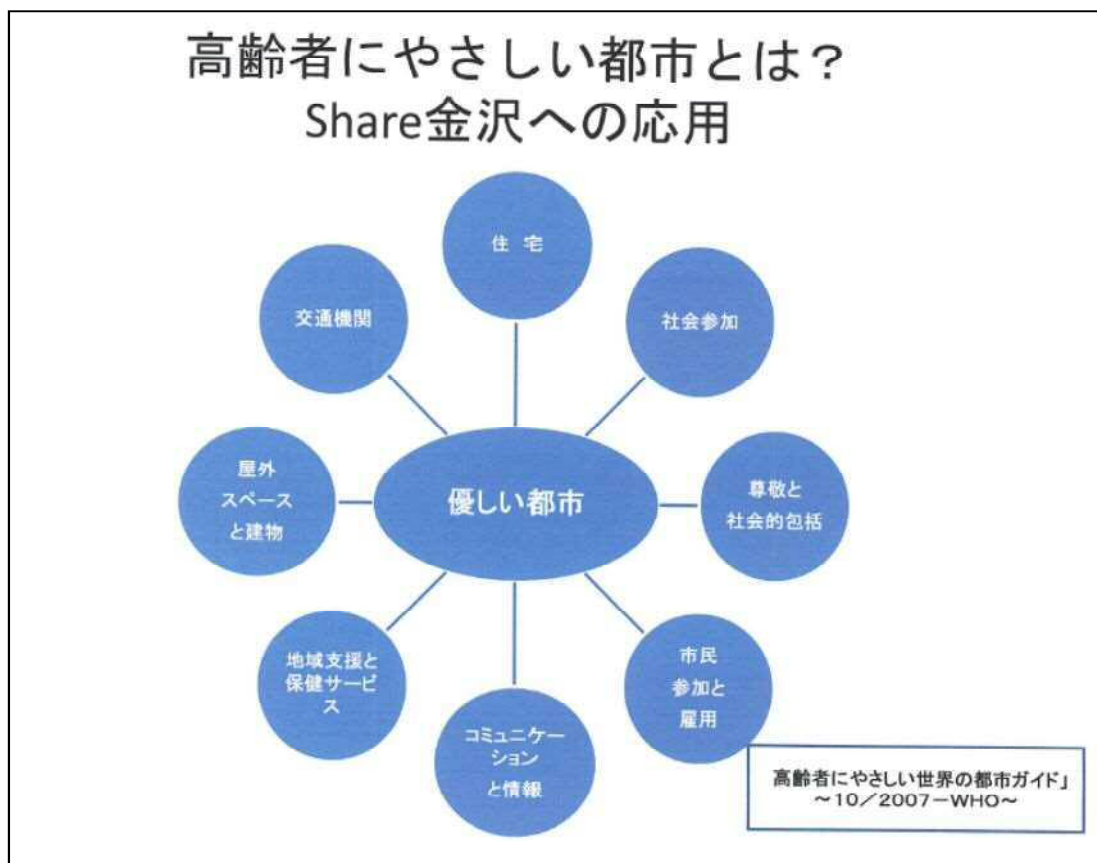


資料4 シェア金沢エリアマップ(シェア金沢資料)

- 住宅は、サービス付き高齢者向け住宅と学生住宅がある。学生住宅は、家賃をこのあたりの相場の半額にする代わりに、ボランティアとして子ども・高齢者・地域とかかわってもらうというのが入居条件になっている。

- シェア金沢には、10人の方にレストラン等の店舗、事務所を開いていただいている。この方々の入居条件には、地域貢献活動を自分たちで考え、最低一つは行っていただくということがある。そうやって集まっていた私たちの仲間である。
- 生きがいのある人は生存率が高くなっていくという、宮城県のデータがある。人生の目的がある高齢者は要介護になりにくい、あるいは高齢者就業率の高い地域は、健康寿命が高くなる等、地域活動、この地域がキーワードになっている。
- こういうデータが本当のことであれば、私たちシェア金沢のスタッフが地域の人たちが前向きに参加できる、いろいろな活動を展開していきたい。健康年齢が伸びて要介護認定率が低くなるように、一生懸命やっっていこうと思っている。
- 小さな子どもたちの時代から、社会的弱者と言われている高齢者、障害を持った人たちの生活を目にして、子どもたちが大人になってくれたときに、この田上という場所が、健康寿命も長くて、みんな元気で他者に優しい町になっていってくれればいいと思う。私たちはそこを目指していこうと思う。
- 佛子園という法人で初めてサービスつき高齢者向け住宅を試みることになり、幾つか勉強し、視察に行った。その中でシェア金沢の考え方を決定づけたのが、WHOの論文だった。
- 2007年に、WHOが世界中にある高齢者に優しいと言われている都市を比較していったときに、次の八つの要素はすべてそろっていたという論文を書いている。必要な要素は、「住宅」「社会参加」「尊敬と社会的包括」「市民参加と雇用」「コミュニケーションと情報」「地域支援と保健サービス」「屋外スペースと建物」「交通機関」である。





資料5 高齢者にやさしい都市とは？(シェア金沢資料)

- 逆に言うと、この八つの要素の一つでも欠けているところは、高齢者に本当に優しい都市とは言えないと書いていた。人の生活、人生を支えている社会福祉法人と言われているが、高齢者に優しい都市をつくらうとしたときに、この八つの要素のうち「地域支援と保健サービス」、「住宅」の二つしか私たちにはできない。この他の六つを社会福祉法人だけでやると、中途半端なことしかできなかったため、私たちは仲間を募ろうという発想になった。その仲間には、先ほどのシェア金沢で店舗・事業所を開業している10名の方々、行政、地域の方々がいる。
- サービス付き高齢者向け住宅の方々のために、交通機関は整えたいと思い、シェア金沢の駐車場の敷地に入り込む形で、屋根付きのバス停をつくった。地域の方から、このバス通りは片側1車線で、冬の時期、朝ラッシュの時間にバス停にバスがとまると渋滞が起こるといった話も聞いた。そのため、地域の人たちにも還元できるように、地域の方々と一緒に行政、北陸鉄道というバス会社を巻き込んで運動した。こういうことをやろうと思うと私たちだけではなく、地域の方々、行政の方々の協力も必要であった。
- 最近、国土交通省が「スマートウェルネス」と言っている。限界集落の問題も含めて、ある程度のことを自分の住んでいる地域でできる、歩いてできるまちづくりということを、国土交通省は「スマートウェルネス」と言い出してい

る。確かにそのとおりだが、高齢者の方々はちょっと歩くと疲れるし、トイレに行きたくなることもある。適度な距離感で休憩所、ベンチ、公衆トイレが必要で、あるというようなことは私たちだけではできない。

- 高齢者の方は孤立する。一人暮らしという物理的なことだけではなくて、情報からの孤立が一番怖いのである。高齢者の方々にどうやって情報を整えて、伝えていく手法が持てるかを考え、シェア金沢の中には、高齢者の方々のためのインフォメーションボードもつくってある。
- 高齢者のためには雇用の機会がつかられていないとだめだと、2007年にWHOが言っている。シェア金沢では障害者が働きに来ると言ったが、その場所はすべて高齢者も働ける場所になっている。地域での社会活動を整えるために、私たちは仲間を募ろうという発想になっていった。
- シェア金沢は今、ほぼ全部の部屋32室が埋まり40の方が住んでいる。半分強が県外の方だが、これは全く私たちの想定外であった。最初は、近隣の方々が引っ越してこられたが、ある時点から県外からの問い合わせが多くなった。首都圏で言うと神奈川県、東京都、埼玉県、それから関西で言うと大阪府、神戸市、広島市、福岡市、そういったところから20数名の方が引っ越してこられた。金沢に縁もゆかりもない方々が多くいる。
- なぜこういうことになったか、私たちも途中から政府の言うことも一理あるのかと思いついた。例えば横須賀市から来られた方は、74歳で1人になり自分の老後は、子どもたちに迷惑をかけたくないため、自分の38年間勤め上げたうえでの年金で入れる部屋、有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅を横須賀を中心とした首都圏で探した。ただ、自分の年金では、6畳1間しか首都圏では見つけられなかったなので、頭を切りかえ、日本中に広げて探し、シェア金沢に引っ越してこられた。確かにそんな方々もいるのだなと実感した。
- この方は、シェア金沢に来たら周りに高齢者がたくさんいるので、お世話するほうに回りたいと言われた。ここで学校を紹介し、ヘルパーの資格を取られて時給で働いている。
- 県外から来られた人、近隣から来られた人が半々で何がよかったかというところ、近隣から来られた方が、県外から来る人のために案内等を行ったため、県外から来られた方が地域へ入っていくことが、とても早かったことがある。
- 私たちが最初からCCRCを目的としてシェア金沢をつくり、首都圏で広報活動をして、首都圏の高齢者ばかりがここに移り住んだとすると、地域への浸透はすごく時間がかかったと思う。

- 私たちはシェア金沢をつくるときに、ごちゃまぜという言葉 키워ドにして、それは高齢者も学生も障害を持った人たちも地域の人たちもごちゃまぜで生活しようという、そもそも地域はそんなものだろうということで始めた。
- ラジオ体操は、地域の子どもたちのほうから、シェア金沢に参加したいと言ってもらった。そうするとサービス付高齢者向け住宅の方も地域の方も参加したりする。
- 田上小学校では年に1回シェア金沢のことを勉強して、子どもたち同士で発表し合うということを始めさせている。

#### (5) 今後の「CCRC」の展開について

- CCRCを展開するときに、エリア型（シェア金沢）、施設型（西圓寺）、タウン型（白山市、輪島市）がある。
- 白山市では、温泉を地域の方々に開放して、高齢者デイサービス、生活介護、就労、西圓寺ではできていなかったショートステイ、放課後デイサービスのよような福祉サービスもプラスして行っている。
- さらに、来年(2016年)の10月から、近隣の保育園は0～2歳児をなかなか預けるところがないので、0～2歳児保育を行う。クリニック、それから温泉熱を再利用しての温水プール、運動できるスペースもつくり、地域のすべての世代の方々と障害者の方々に特化したウエルネス事業を展開する。白山では地方創生の枠組みの中で、これからシェアハウス、サービス付き高齢者向け住宅をつくっていき、CCRCを展開しようとしている。既にこのエリアで10個の障害者のグループホームをつくっている。
- 近隣の開業医の皆さんと連携して、ここのクリニックに受付診療で来た障害者を持った方、サービス付き高齢者向け住宅の方、地域の独居老人の方を、的確に地域の医療機関につないでいく。さらに、金沢の薬局に進出していただいて、このクリニックで受けた処方箋をその薬局に送ると、曜日毎、時間毎にきれいに仕分けされて飲み間違いがないように整えた薬を、すべての高齢者や障害者や独居老人に届けて回るというシステムを組み入れて行っていく。

- 輪島市に関しては、佛子園と青年海外協力協会とジョイントベンチャーでまちづくりをしている。漆のまち輪島というローカルプランニングを、交通システムを取り入れながら、CCRCの枠組みの中で展開してしまおうという考え方である。

### 第一期モデル事業を目指す新事業

- ・ ローカルブランディング
- ・ 「生涯活躍のまち」構想を中心とした多世代共生
- ・ 新交通システムの導入
- ・ 高齢者移住のみならず地方創生を担う若者の移住

「ローカルブランディング」×「日本版CCRC」

#### 資料6 輪島市KABULETプロジェクト(シェア金沢資料)

- この事業が地域活性化・地域住民生活等緊急支援交付金の交付対象に決定した(約200事例の中のトップ5に入る)。先行事例になったので、国と既に事業を進めている。
- 石川県輪島市河井町にもCCRCを展開していく。能登沖地震、人口減少で増えている輪島の空き家を利用して、リノベーションするときに全部漆を使おうと考えている。輪島塗は、バブルのころには、170億円の売り上げがあったが、美術品と工芸品しかつくりなくなっていて、日常使いの輪島塗を切り捨てたため、現在30億円を切っている。
- もう1回輪島市を漆のまちにつくり直そうとしている。建物も、使用するすべての食器、家具も漆にする。温泉、カフェ、働く場所も、まちなかに点在させていくというのが輪島市のまちづくりである。
- さらに、国土交通省から許可を取って、ゴルフ場の電動カートをまちなかに走らせる。この車を空き家を利用してつくったサービス付き高齢者向け住宅等に1台ずつ配備し、この辺りに住んでいる高齢者の方が買い物、病院等に行く時に利用できるようにする。免許のない高齢者の方には、世話人さんが運転して連れて行ってくれるようにしていく。
- そのまちづくりにかかわるのは、青年海外協力協会から来る青年海外協力隊のOBたちで、今、既に輪島市に移住する人たちが家族も含めて30人決まった。そうやって定住人口も増やしていこうというのが、輪島市での取組みの考え方である。
- 空き家を福祉施設に使おうとすると、建ぺい率、容積率、構造の問題等、いろいろな問題が出てくる。それを全部特区で突破していこうと考えている。

(6) シェア金沢と金沢大学の連携事業について

- 地方創生で、首都圏の高齢者が地方に行く話ばかりだが、私たち田舎の人間にすると、大事なものは若者の定着である。
- 金沢大学が中心になり、いかに若者に定着してもらうかということを含め、石川県のすべての大学の連合で行っている。石川県内の大学4年生が、県内に残って就職する率は36%で、それを46%まで引き上げようというのが数値目標、KPIである。
- 10%引き上げるために、三つの取組みを行う。一つ目は、石川県内のすべての学生に、なぜ地方創生が必要なのか、限界集落の問題も含め、このままだと日本の国が地方から壊れていってしまうということを学んでいただく。その中に能登学、金沢学、加賀学というのを織り込んで、郷土理解、郷土愛につなげていくという授業を実施する。
- 二つ目は、学生たちがどんどん地域とかかわれるように、インターンシップを徹底的に開発する。
- 三つ目は、学生が起業に取り組みたいときに、今までは相談はしてもお金のバックアップができなかったが、具体的に北國銀行と北陸銀行に協力いただき、学生の起業を資金面からもちょうと応援するスキームをつくることになった。この三つの取組みに5年間取り組んで、大学4年生の就職率を46%まで引き上げる。
- 二つ目の事業のインターンシップの開発については、佛子園で行ってほしいという依頼があった。例えばシェア金沢では、地域の皆さんとのかかわり、いろいろな催し、仕掛けをつくっていく中心になるのが今後学生になる。また、金沢大学が一般教養を中心とした授業をシェア金沢で実施しているので、田上の住民は、生涯学習という形で無料で受講できる。
- 白山市、輪島市、西園寺、小松市に県内の学生たちが常駐で、それぞれの地域のまちづくりにかかわっていく。これが私たちの佛子園のかかわり方になる。私の立場から言うと金沢大学がシェア金沢のまちづくりの11番目の仲間になってきたという感じがしている。

以上の話を伺った後、質疑応答、意見交換が行われたので、以下に主なものを掲載する。

(質問) 福祉は、それぞれの地域にきずなやつながりがあって、そのつながりでケアができていたところだが、今、日本の社会から人々のつながりや地域のつながりが薄らいでしまうというので、逆に、福祉という活動を軸に活動することによって、人のつながりをもう1回りハビリというか機能回復していこうということだと思ふ。地方創生は、ともすると、そういうつながりがもうないから人を動かそうというところがある。北陸のあたりはまだいいが、関東では人口を地方に移すということが地方創生で、住民は移せないから、介護の必要な人を移す、観光客を移すというような発想になっている。少し移すということを出し過ぎているので、これは少し気をつけて本質を失わないようにしてもらいたいと思っている。ちなみに観光は日本人が使い方を間違えている。観光の観というのは悟りを開くという意味で、光というのは明るい希望。観光は、明るい希望を見て悟りを開くことである。

(回答) 西圓寺、シェア金沢、佛子園もそうだが、施設・お店をつくと「人を寄せて集めるのが上手だね。」と言われることがある。それはたぶん私たちが上手なのではない。その場所、お店に当たり前のように出ているのが、障害を持った方々、介護の必要な高齢者、地域の方々に、1人で行っても、あまり入るのに勇気が要るとか、ドキドキするということが全くなくて、自然とずっとそこにいられる雰囲気があるからだと思う。

私たちが、何か仕掛けてつくっているのではなくて、どんな人がいても孤立感がない、自分だけ浮いた気がしないと言う場所、店になっている。それは、どちらかと言うと福祉を展開するときに、隠されたり、隔離されたり、分けられたりしているような人たちが前面に出ているので、そんな変化ができていのかと思っている。私たちがうまいわけではなくて、その方々のおかげなのかと思っている。